

言語変化における「主要部省略」というメカニズム

平田 裕 (Yu HIRATA)

立命館大学

1. はじめに

言語の形態/構造的な変化の代表的なメカニズムとしては、analogy（類推）や grammaticalization（文法化）などがあげられる（Hock 1991, Hopper and Traugott 1993 など）。本稿で議論する「主要部の省略」は、語や句のレベルでは deletion（省略/脱落）であり、それ自体はよく知られた言語変化のパターンである。本稿ではこれまでより視点を広げ、「主要部省略」が言語構造の様々なレベル（通構成素性）、および、様々な言語で（通言語性）観察される現象であり、言語変化を促す基本的なメカニズムの1つであることを主張する。しかし、通言語性を検証するデータは本稿ではまだ充分とは言えない段階である。また、広範囲に作用している基本的なメカニズムということでは、機能面、認知面からの更なる検討が必要である。

本稿で検証する「主要部省略」の主な例は、①属格を含む名詞句（e.g. 「N の N」, 「N の 方が」）、②言い差し表現/脱従属節化（e.g. 「し」で終わる発話）、③文頭に現れる「はあ」「があ」「もお」「にい」などで、適宜、対照的に日本語の方言データ、英語や中国語などのデータも検証する（通言語性）。

2. 「主要部」の定義

言語学において「heads（主要部）」という概念/用語は主に統語論で使われているが、その識別法や定義に関しては様々な異論があるところである（Zwicky 1985, 1993; Hudson 1987 など）。しかし、基本的な考え方としては、「heads（主要部）」とは NP/AP/VP などの句の統語的カテゴリー、つまり、統語的な性質を決定する語と考えるのが一般的である。この考え方は、「heads（主要部）」は統語論内の概念/用語であり、それぞれの句に対して一義的に決められるものであるという前提に立っているとも言える。

それに対し、本稿では「heads（主要部）」の概念を複数要素間の相対的なものとして拡張し、「ある言語構造上の範囲で最終的に修飾（情報の付加）を受ける部分」とする。これにより、語、句、「従属節-主節」、「文-文」など、様々なレベルでの言語現象・言語変化に対して包括的な見方ができるようになる。主要部は談話の中で既知や自明の情報であることが多く、省略されやすいと言える。

3. 「主要部省略」の具体例

3.1. 属格を含む名詞句

属格を含む名詞句は文の構成要素としてごく基本的なものであり、使用頻度も高い。属格の用法の中でも所有を現す表現において、主要部省略から文法化とも関連する言語変化が生じており、それが日本語の方言間や、英語、中国語などでも観察されるのは興味深いことである。

表 1. 方言間で同様に見られる属格の歴史的変化(方言データは国立国語研究所 1989 など)

	①属格	②代名詞的属格	③形式名詞	④名詞化辞	⑤終助詞的用法
標準語	俺ノ手拭	俺ノ	長いノ	重いノに	何してるノ？
福岡	ノ ガ	俺ント 俺ガツ	長いト 長かツ	重いノに 重かツに	なんしよット？
富山	ノ	俺ンガ	長いガ	思いガに	何しとんガ？

上の表で、①の「N の N」に対し、②は「の」の後続の名詞（主要部）を省略した形であり、この省略によって属格「の」に形式名詞的な機能が生じている。以下、文法化の過程を経て、③形式名詞、④名詞化辞、⑤終助詞的用法まで変化している。この一連の変化は、福岡方言では属格「つ」、富山方言では属格「が」で発生し、方言間の用法が対応していることが確認できる（Hirata 2001）。

近年の日本語の変化の例としては、下の(1)(2)に示すように比較表現中の名詞句「N の方」から主要部である「方」を省略した使い方が観察される。

(1) 穴子天のが美味しいよ。（←穴子天の方が美味しいよ。）

(2) これのがいろいろと問題。（←これの方がいろいろと問題。）

(2 つともネット掲示板からのデータ)

上の(1)(2)の例が特に興味深いのは、元の表現において「方」は比較の機能を生じさせる一番重要な要素であるにも関わらず、それが省略されることによって「N のが [N-属格-主格]」という並びが比較表現の機能を獲得しているところである。「N のが」という比較表現は所謂若者言葉であるが、筆者が見る限り、ネット上でかなり一般化しており、日常会話でも聞くことができる（定量的な確認はできていない）。

「N の方」における「方」の省略には、「後続要素が主格の「が」であり、それによって択一表現であることが分かる」というのが必要条件になっているようである。つまり、「穴子天の方も美味しいよ」や「穴子天の方に決めた」など、「が」以外の助詞が後続する場合は「方」は省略されない。（これまでの筆者の観察においては。）

次に、現代英語の例であるが、所有格および所有代名詞(的用法)に上の表 1 で見たのと同様の対応関係が見られる。下の表 2 に提示しているが、固有名詞（人名）の場合は suffix *-s* が所有格を表し（*Mary's car*）、所有代名詞的な用法では主要部である後続の名詞を省略することによって *-s* が代名詞の機能も担っている（*Mary's Φ*）。人称代名詞の所有格で [z] の音を含むものは *his* だけであるが、所有代名詞になると代名詞機能を果たしている形態素 *-s* が全ての人称代名詞に付加されている。

表 2. 英語に見られる所有格表現と被所有物（主要部）の省略

	①所有格	②所有代名詞(的用法)
固有名詞	It's Mary's car.	It's Mary's Φ.
代名詞	It's her car.	It's hers.

英語の所有代名詞の発生は14世紀のMiddle Englishに遡るとされているが(Onions eds. 1966; Barnhart eds. 1988)、上述の関係は *hire* ‘her’ vs. *hires* ‘hers’ 等にも見られる。形態素で考えると、-(e)s は Old English からきている属格形成の suffix であり、主要部である名詞省略によって代名詞機能を付加された -(e)s が人称代名詞の所有格に付加されるようになったと考えられる。

この所有格の形態素が代名詞機能を担う変化であるが、英語の方言には -s とは違う形態素で生じたものがある。イギリス南部方言の所有代名詞は *hern* ‘hers’, *hisn* ‘his (thing)’; *ourn* ‘ours’ などであり、この[n]の音は Middle English の *mine* ‘my’, *thine* ‘your’, *uren* ‘our’ などの人称代名詞の所有格にも含まれている。また、Middle English には名詞複数形の属格を形成する suffix -en(e) があり、-n が代名詞的機能を担うようになったのは、これらの所有表現から主要部の後続名詞を省略することにより派生したものと推測できる。(Middle English Dictionary by University of Michigan 参照)

下の(3)から(5)に示すように、英語における属格表現の主要部省略は of を使った表現にも生じている。表現としては非生産的であるが、英語の syntax からするとこの表現における of には形式名詞的な意味/機能が生じていると考えるのが妥当である。

(3) For the EXPO 2012, we are expanding the scope of activities, which are Φ of interest not only to the participants of ... (Lingee から、元は東京マラソン財団広報ページ)

(4) Jesus answered, “My kingdom is not Φ of this world. (新国際版聖書 John 18:36)

(5) Kindly remember, the ridiculous hype that offends so many is not Φ of my making.

(商品上のキャッチコピー)

中国語では、日本語の属格「の」に対応する形態素は「的」であるが、下の表 3 に示すように終助詞的な用法まで文法化が起きている。

表 3. 中国語に見られる所有格表現と被所有物（主要部）の省略

①属格	是我的书 ‘私の本です’
②代名詞的属格	这是我的 ‘これは私のです’
③形式名詞	紅色的 ‘あかいの’ 吃的 ‘食べ物’ 走路的 ‘歩いているの(人)’ 开车的 ‘運転手’
④名詞化辞	是小王第一个跳下去的 ‘一番に飛び降りたのは王さんだ’ 他是跟你开玩笑的 ‘彼はあなたに冗談を言っているのです’
⑤終助詞的用法	你什么时候来的 ‘あなたはいつ来たの?’

④の例文は、袁 (2003) より

表 3 に示した中国語の「的」の諸機能は、表 1 の日本語の「の」の諸機能と対応するものであり、属格を含む名詞句から主要部の名詞を省略するところから始まったと考えられる。日本語の名詞化辞「の」は生産性が高く、それを含む名詞句は文中の様々な要素として使えるが、中国語「的」の④名詞化辞用法は「～是～的」という形をとり、「的」は文末に限定されている。

3.2. 言い差し表現/脱従属節化

「従属節-主節」の関係で考えた場合、主節の方が主要部であり、日本語における言い差し表現や広く脱従属節化 (insubordination) として研究されている現象も (e.g. Evans 2007, 高橋 2014, Evans and Watanabe 2016 など)、その用法/変化のモチベーションとしては主要部省略であると見ることができる。

現代日本語 (共時的) の「言い差し表現」を包括的に研究したものには白川 (2009) がある。その分析では「言い差し文」を「言い残し」「言い尽くし」「関係づけ」の 3 つに分類しており、後者 2 つに関しては発話を途中で止めたのではなく、独立文と同等の完結性を持つ形式であると主張している。言い換えると、形式的には明らかに従属節でありながら主節となる変化を遂げていると解釈している。下の(6)(7)が「言い尽くし」、(8)(9)が「関係づけ」の例である。(以下、白川 2009 より、例番号変更。)

(6) 「ダンス歴は?」「まったくの初めてですけど。」

(7) ちょっと、煙草買うてくるから。

(8) そういう道は、納得いく形で自分を生かすことはできないと思います。魅力も感じていませんし。

(9) ちょっと来てくれる? 心細くて。

上の例からも分かるように、それぞれの主要部 (主節) の妥当な例をいくつか考えるのは難しくないが、1 つに確定することはできない。つまり、「従属節-主節」で実際の主節が省略されたという段階ではなく、脱従属節化が十分に進んだ段階であると言える。最初から独立性が高い用法として確立されていたという可能性に関しては、接続助詞/接続形式を含むという属性から、本来は主節がある形で使用されるものと考えるのが妥当である。談話においても和歌などのジャンルにおいても、途中で文をやめることや、倒置によって従属節が主節から切り離されることは古くからごく普通に起こっている (使われている) 現象 (技法) であり、通常の言語使用は節単位の「主要部省略」につながり易い条件が揃っていると言えるだろう。

接続助詞「し」に生じている近年の変化は、「主要部省略」の通時的過程がある程度見えるものである。まず、接続助詞としての成立であるが、鈴木 (1990) や京 (2015) 等にその用例が提示されている。成立過程の詳細については研究者間で異論はあるが、確認できる最古の用例としては狂言の台本である虎明本 (1642) および天理本 (1640 年代) からのものということで一致している。虎明本に 5 例、天理本に 3 例が見られるとされているが、下に 1 つ提示した(10)のように、全て助動詞の「まい」に下接して「～まいし、～」の形で使われており、後続の主節が省かれた用例はない。

(10) 路次すがら付合をして、付たらは松を取るまいし、ゑ付ずは松をとらふ
(虎明本「富士松」)

接続助詞「し」の成立以降の変化の過程を簡易的に表すと、【接続助詞「し」】から【言い差し表現の「し」 (主要部省略)】を経て【終助詞的「し」】となる。「し」が終助詞的な

用法を持つようになったのは近年のことであるのは、その用法が若者言葉の 1 つだと捉えられていることから分かる。終助詞「し」を研究対象にしたものには栗原（2009）、近年の「し」の使用実態を日本語教育の視点から研究したものには阪上（2015）などがあるが、国立国語研究所の文献データベースで見る限り、このような「し」を取り上げた研究は 2000 年代に入ってからである。下の例は筆者が小学生の口喧嘩で聞いたものであるが、或る特定のモダリティを伴っていると解釈できる。

- (11) a. そんなん知らんし。 b. いや全然違うし。

3.3. 文頭に現れる「はぁ」「がぁ」「もぉ」「にい」

最後に「名詞（句/節）-助詞」という形からの主要部（名詞（句/節））省略を取り上げる。本稿内の順番を最後にしているのは、この省略が実現するには「文（省略要素含む）-（省略後）文」の形が必要だからである。この用法も上述の終助詞「し」と同様、若者言葉の 1 つと見られている。先行研究としては、下谷（2010）、有田（2005, 2015）などがある。研究の中心となっているのは文頭の「はぁ」であるが、有田（2015）が提示しているように、他の助詞でも名詞（句）の省略は発生する場合がある。以下、有田（2015）の例を提示する（対象の助詞はローマ字表記、例番号は変更、表記方法は一部変更、(16)は林（2005）から。）

- (12) A: こしあんは売り切れ? B: Wa: 売り切れました。
(13) A: 菓子パンって朝から食べれる? B: Wa: ちょっとつらいな。
(14) A: ほんと湖と（うん）林、ていうか森なんだけど。 B: ど、どっちだ。
A: Ga、あるだけで、（うん）もう周りの町とか、からはもう完全に、
何ていうか、離れてて。
(15) A: 食べながら練習するの? B: Mo あります、はい。ササミ食べながらとか
(16) A: (そ) やから: あの: う: もし 六時半やったやんな: B: うん。
A: Ni: たどりついてなかったら:

上の(12)と(13)が文頭の「はぁ」の例であるが、有田（2015）が指摘するように、省略され得るのは実際に発話された名詞（句）だけでなく、発話された内容から考え得る名詞節、すなわち、(13)では「菓子パンを朝から食べるの（または、「それ」等）」だと解釈できる。

本稿が提案する「主要部」の定義は「ある言語構造上の範囲で最終的に修飾（情報の付加）を受ける部分」であるが、「名詞（句/節）-助詞」の構造において、助詞が前接の名詞（句/節）に対して文法的機能を付しているので、名詞（句/節）が主要部ということになる。

4. 「主要部省略」の拡張性、および、まとめ

具体的な検討は今後の課題であるが、本稿が提示した「主要部省略」という見方は、他の様々な言語現象に共通性を見出すものだとも考えられる。例えば、英語の曖昧母音化 (e.g. *Ask him.* [æsk həm]) や日本語の母音の無声化 (e.g. 草 [kɯsa]) も、母音と子音という対比

において、主要部の省略、ここでは弱化になっている。また、談話内の名詞句における関係性、【固有名詞/普通名詞】から【代名詞】、そして【Φ（トピック省略）】も主要部の具体性/個別性の希薄化、省略につながる動きだと見ることはできないだろうか。明らかに省略した例としては、【A: 発話】に対して、【B: そうかなあ/そうかもね】vs. 【B: Φ かなあ/かもね】などもある。

談話の流れで考えると、肯定/否定/追加/修正など、後ろの発話が前の発話に情報を付加するというパターンの場合、前の発話は相対的に（後ろの発話に対して）主要部であるといえることができる。副詞のみの返答、例えば、「いかにも」、「たしかに」、「もちろん」、「Definitely」、「Certainly」などは主要部の全省略である。また、「ですよねえ」、「It sure is」、「是」、「是的」などの表現もコピュラ部分だけを残して主要部を省略したものといえることができる。

本稿の「主要部」の定義は、修飾関係や情報（文法的機能も含む）の付加という観点で相対的に決まるという考えを採った。「広く当てはまる」ということは、「厳密性に欠ける」という弱点を伴うことも多く、本稿の定義も更なる検討が必要である。

【参考文献】

- Barnhart, Robert K. (ed.) (1988) *The Barnhart dictionary of etymology*. The H. W. Wilson Company.
- Evans, Nicholas. (2007) "Insubordination and its uses." In Irina Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and empirical foundations*. Oxford University Press. pp.366-431.
- Evans, Nicholas and Honoré Watanabe (eds.) (2016) *Insubordination*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Hirata, Yu. (2001) *Historical changes of genitive particles in Japanese: Specific issues and broader implications*. Ph.D. dissertation, The Ohio State University.
- Hock, Hans Henrich. (1991) *Principles of historical linguistics (2nd edition.)*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott. (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hudson, R. A. (1987) *Zwicky on heads*. *Journal of Linguistics* 23, 109-132.
- Onions, C. T. (ed.) (1966) *The Oxford dictionary of English etymology*. Oxford: Oxford University Press.
- University of Michigan, *Middle English Dictionary*
<https://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary>
- Zwicky, A. (1985) *Heads*. *Journal of Linguistics* 21, pp. 1-29.
- Zwicky, A. (1993) *Heads, bases and functors*. In G. Corbett, et al. (eds.), *Heads in Grammatical Theory*. Cambridge University Press., 292-315.
- 有田節子 (2005) 「対話における「文頭の『は (wa)』」の機能について」『日本語用論学会第 8 回大会発表論文集』, pp.1-8.
- 有田節子 (2015) 「日本語疑問文の応答の冒頭に現れる「は」について—係助詞から感動詞へ—」『国立国語研究所論集』 9, pp.1-22.
- 袁毓林 (2003) 「从焦点理论看句尾“的”的句法语义功能」『中国語文』第 1 期 (总 292 期), pp.3-16.
- 京健治 (2015) 「接続助詞「し」の意味用法とその来由」『島大國文』 35, 島大國文会, pp.17-30
- 栗原さよ子 (2009) 「終助詞化した「し」」『学習院大学国語国文学会誌』 学習院大学国語国文学会, pp.1-15.
- 国立国語研究所 (1989) 『方言文法全国地図 (1)』 大蔵省.
- 阪上彩子 (2015) 「話しことばにおける接続助詞「し」の使用実態」『日本語・日本文化』 42, 大阪大学日本語日本文化教育センター, pp.123-135.
- 下谷麻記 (2010) 「発話頭に現れる助詞「は」の使用とその相互行為上の役割—自然会話における文構造の一考察—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 20, 関西外国語大学留学生別科, pp.97-118.
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』 くろしお出版.
- 鈴木浩 (1990) 「接続助詞「し」の成立」『文芸研究 (明治大学文学部紀要)』 明治大学, pp.149-168.
- 高橋靖以 (2014) 「アイヌ語十勝方言における名詞化節の脱従属節化」『北方言語ネットワーク編, 『北方言語研究』 4, 北海道大学大学院文学研究科, pp.149-155.
- 林誠 (2005) 『「文」内におけるインターアクション—日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって—』 串田和也・定延利之・伝康晴(編)『活動としての文と発話』 ひつじ書房, pp.1-26.